

うに懇親会企画を決定されました。さて、“VRと舞妓さん”をどうくっつけるべきか、そこから深遠な悩みが始まりました。

参加された皆様は記憶に新しいように、芸妓さんのまさに華麗な祝舞で始まった懇親会は、客をもてなすプロである舞妓さん、芸子さんの一同のおかげもあり、非常に賑やかな宴となりました。また、恒例の論文賞授与式でも舞妓さんにプレゼンターを担当頂き、受賞者には二重にうれしい授与となりました。そして、最大の難関として如何に“VR”と“舞妓さん”を結びつけるかについては、今回のお茶屋さんとの架け橋となった高橋先生が自ら調査と報告をかっていただけのこととなりました。結果的には、なかなか普段の生活では味わいがたいVRな世界を堪能頂けたのではないのでしょうか。

今となっては名物の感もあるVR学会の歴史であり、来年の第10回記念大会での企画モノを今まで以上に期待しています。

最後に、台風の影響で当日まで参加できなかった懇親会担当は単に当日に走り回っただけでした。今回の懇親会の多くの段取りを計ってくださった高橋先生と会計の黒田先生、ほか皆様に感謝いたします。



高橋先生による講演“VRと舞妓さん”

なら学生バイトに対して大会会場にて陣頭指揮をとるという役割が求められていたのであるが、大迷惑をかけてしまった。美濃先生発案の分散協調型指揮系統の徹底で大きな問題はなかったと聞いている。感謝する次第である。次に思いつくのが看板作成についてである。看板作りでは、京都らしさを表現するために招待講演タイトルに含まれる“曼荼羅”の図案をそこはかとなく配置できればと考えたが、どうやって手に入れたらいいか悩んだ。幸い、真鍋先生から予稿集背表紙用に使った図柄をいただくことができ、全看板について曼荼羅を左上に配置するデザインに統一することができた。気づかれた参加者がいたら嬉しい限りである。ちなみに図案提供は、招待講演された真鍋先生からではなく実行委員の真鍋先生からである。お二人の間に特に関係はないとのことらしいが、何か因果を感じてしまう。(小山田耕二)

会場担当をご一緒させて頂くことになった当初は、実は「ばるる京都」での開催を想定し、予算を覗んだ部屋割りのやり繰りや展示スペースの検討を行っていた。一方、昨年秋のこと、竣工前の京都大学百周年時計台記念館を下見に訪れた。大会長の美濃先生、総務で奔走された角所先生と共にヘルメットをかぶり、各ホール、会議室等を見学した結果、改めてここをメインの会場とする方向が定まった。ただ、全てが新しいという魅力の傍ら、ホールの電源容量が展示には不足しているという新しさ故の課題も残っていた。臨時増設は許されるか、または恒久的な増設計画がないのか、状況把握に困難を伴いご心配をお掛けしたが、最終的には恒久増設の許可が得られ、機材搬入日に何とか間に合うに至った。皆様からのお力添えや、夜間工事のご対応の賜物で、深謝する次第である。結果として、時計台記念館の設備がこれを機に増強されている。盛況裏に閉会した本大会の一つの置き土産のように感じられる。(牧淳人)

## ◆会場担当より

小山田耕二

会場担当(京都大学)

牧 淳人

会場担当(京都大学)

会場担当として、学内イベント参加のため大会そのものに参加できなかったことをここでお詫びしたい。本来



京都大学 百周年時計台記念館